



地から湧いた幸福(二)

金子彦二郎

九

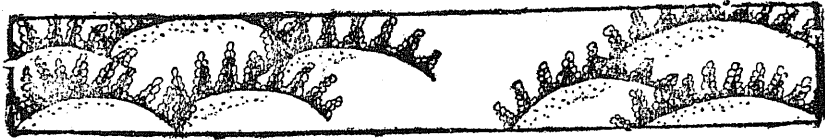
一生の大願を果し得た孫九郎が、心も空の大満足を胸一ばいに膨らませて下向道を四五歩運んだ時、「もしく」と後から誰か呼びかける聲がしました。併しこの邊で知合のあらう筈もない孫九郎は、自分の事とは露思らず、聞かない振りで尙二三歩行きかけると、
「ばたく」と駈けよつて耳元で「もしく」と、いふ人聲がする。思はず振り返つて、

「俺わがのことかい。」

と、ぶつきらばうな挨拶をすると、

「はいく、左様でございます。餘りだしぬけに甚だ失禮でございますが、少々お尋ね申上げたことがございまして……」

と丁寧な物言ひ。「この田舎者の俺に、見れば腰元の二人も供に連れた大家の奥方とも思はれる人が、何の用かしら。」と訝しくは思つたが、



「へえ、この俺わらわに……これ御寮人、田舎物をからかふではねえだよ。」

「いえ、どう致しまして、おからかひ申すなどは滅相な。決してそんなたはけた事ではございません。あの……甚だ突然に……無躰なお尋ねでございますが、もしやあなた様は息子さんをお持ちでいらつしやいますまいか。」

「息子けえ、息子なら孫一てえのが一人あるが、それを聞いて何にするだね。」

「まあ、うれしい。有難い。……それで、あはまだお獨り身でいらつしやいませうね。」

「あ、今年はもう二十だからよい嫁女を貰つてやらうと思つてゐるだが、丁度釣合つた者がねえでな。」

「え、左様でございますとも、あなた様のお家のやうな御大家には滅多に釣合ふやうな御身代の方のあらう道理がありません。……あの申しおくれましたが、私はあの大阪の鴻池の家内でございまして、丁度年頃の娘を一人持つて居りますが、あちこちからの縁談も、丁度釣合ふやうな處がなく、今日も今日とて御本山へよい縁家の見つけかりますやうにとわざ／＼祈願にまゐりましたのですが、圖らずもあなた様のやうなお方にお目にかゝれましたも佛のお引合せと飛び上る程喜んでゐるのでございます。甚だ無躰な申分ではございますが、不束ながら手前の娘を其の孫一さまとやらの嫁にお迎へ取つては



「下さりますまいか。」

この突然な、しかも夢に見ることさへあらうとは思はれぬ申出に、孫九郎はすっかり度肝をぬかれ目を白黒させて開いた口も塞がらぬ有様。

「へえ——、鴻池の娘御様を俺の倅の嫁女に……いや途方もねえ……これく戯談もいい加減にしなせいよ。」

と言へば、

「そりや、あなた様のやうな御大家から御覽になつては、私の家などは吊鐘と提灯で、逆も釣合ふ處ではございませんが、そこをどうぞ御承知下さいまして、是非どうぞ……」
と眞實、面に表はしての懇願に、孫九郎はますます呆れ果て、

「はは、こりや、氣狂に違ひねえ、あんな立派な姿をしてゐながら心の駒が狂つてゐるんだ。あゝかはいさうなものだ。え、まよ、まよ、氣狂と眞面目な談判を始めたからつて暖簾と腕押し、よし、こりや一つ何でも向ふの言ふまゝを聞入れて安心させてやるのが人助けといふもの。」

と、かう腹をきめましたから、四角ばつた語調でかういつた。

「いや御寮人、それほどまでに見込んで仰しやつて下さるなら、よろしうござる。御娘御



の儀は、たしかに俺の息子の嫁女に申し受けることに致しませうよ。」

「まあ、御無理なお願を早速お聞届け下さいまして、こんなうれしいことはございませぬ。さぞ、夫も娘も喜ぶことでございませう。これと申すも靈驗あらたかなみ佛のお引合せ、有難や。さていよくさう話が決着致しましたからには、御國と御名前を承らせて頂きたうございます。」

「わしの國 随分遠方だよ。越後の蒲原郡でね、名前は間瀬の孫九郎といふ者よ。」

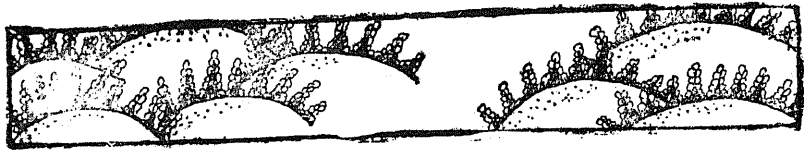
「ありがたう存じます。就きましては、輿入れの時日も序にお決めをお願い申したうございますが。」

孫九郎は何といふ氣早な相談だらうと思ひましたが、「どうせ相手は氣狂だ、氣休めにさへなればよいのだらう。」とかう思つてゐるので、戯談半分に、

「さあ、俺の方でも少しは支度もせねばなんねえから、來年の三月の十五日と決めておかう。」

と言ひ出すと、

「來年の三月十五日、え、至極結構でございます。それでは間違ひなく當日には送り届けますから、末永く目にかけてやつて下さいまし、お願申します。あ、これで私も安心



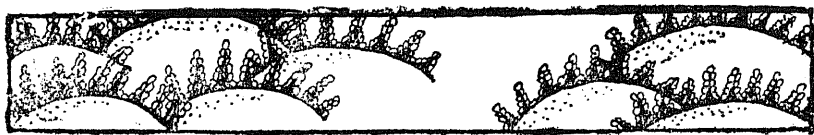
致しました。誠にありがたうございました。では御機嫌よろしう。」
と丁寧にあやまりをして引きとりました。

孫九郎はまるで狐にでもばかされた人のやうに、ぼかんと立ちつくしてその婦人の後姿を見送つてゐましたが、いよ／＼其の姿が見えなくなると「氣狂ひつて、どうした神様のいたづらから出来るもんか知らねえが、世にもかはいさうなもんだなあ。」と溜息を洩してゐました。

一〇

西行法師は「……命なりけり小夜の中山」と歌つて居りますが、ほんとに命なりけりで大事な歸國旅費の大半をふとした不注意から、心ならずもお賽錢として喜捨してしまはされた孫九郎は、幾百里の長い道中を、物乞ひしながら、それでも無事に越後路へと足踏み入れて、村を離れてから半年振りに懐しい生れ故郷へ幽霊のやうな竄れた姿を表はしました。

玄關へ出迎へた息子の孫一さへ、永い旅篋れから餘りに變り果てた父の姿に、一時はそれと信じられない程でありました。それで疲れ切つてゐる父を助け入れて、好みの食物を取らせ、蒲團を敷いて寝かせてやりました。そうして足や腰をさすつて勞つてゐると、や



つと少し元氣回復した孫九郎は、

「有りがてえ〜。かうして無事で國へ歸つて、お前から大事にして貰へるのも、みんな佛様のお力だ。南無阿彌陀佛々々々々……」

「あゝこれ、孫一や、お前にやるいい土産があるぞ……」

などと言ひ出しました。さつき背中の風呂敷を解いてやつたが、土産らしいものなど一つも無かつたことを知つてゐる孫一は、おかしさをこらへながら、

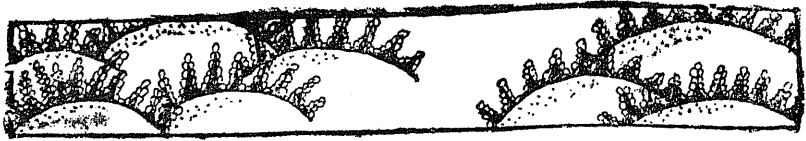
「えい、私へのお土産ですつて、どれどこに」

「まあ〜、さう急せぐでない。お土産といふのは五色豆や八ッ橋の類でなく、活きた京人形だよ。大阪鴻池の娘御をお前の嫁に貰つて来てやつたんだよ。どうだ豪勢なもんだらう。」

戯談半分らしくはあつたが、父がかういつたのを聞いた孫一は、噴飯して笑ひながら、

「そりや大變なお土産だ。どこにゐますか。」

と、これもからかひ半分にかう問ひ返しましたが、其の次の瞬間に、すぐ額に皺を寄せて深い吐息をつき、「あゝ〜、あんまり見馳れぬ他國や長旅で氣苦勞したもんで、こりや少々氣がふれてゐるやうだ。だから私があんなに止せ〜と言つたのだが……何しても困つ



たことだ。」と心の中で唸きました。併しそんなことには氣づかない孫九郎は

「まあ、楽しみにして待つてゐるだよ。來年の三月十五日になるとね、大名のやうな立派な供揃へで乗り込んで來るからな、はは……。」

とかう言つて愉快さうに笑つてから、いつしか眠りに落ちていきました。

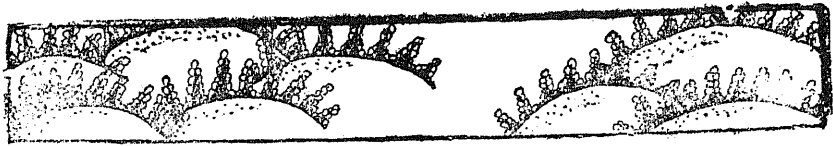
孫一は脚を揉む手を休めると、もう一度其の旅疲れして日に焼けた父の顔をのぞき込んで溜息をもらしました。

一一

孫九郎は日が經つに従つて元氣になりました。さうしてあちらこちらへ招かれて行つては、この村人達の誰も見たことのない上方の話や御本山の話や、さては道筋の諸國の風俗や、山路の怖しさなどを、誇張たつぷりな表情で物語つて得意がつてゐました。勿論「來年の三月十五日の約束」などは、再び言ひ出しもしなければ、待設けても居ませんでした。

併し曆の仕事には休日がなく、絶えず今日を昨日へ、明日を今日へと持ち運ぶことを忘りませんでした。孫九郎親子の頭からすつかり忘れられてゐた來年の三月十五日は、いつの間にかこつそり漂着してゐました。

ある日の朝です。七兵衛といふ魚賣りが恐しくあわてた調子で孫九郎の家へ飛び込んで



來ました。

「これく、孫九郎どんや、お前はまあとんでもねえ人ぢや。去年上方參りをして來たといふが、あちらで何か悪いことでもして來ただな。」

「おいく、口の利きやうもあらうもの、この善人の俺を悪黨呼ばはりには、何か其の證據でもあつてのことか。」

「あるともく、今な、俺が魚を賣りに在方へ行かうと思つて峠まで行つたのぢや。するとな、立派なお武家が何十人といふ捕方を引連れて、『これく、間瀬の孫九郎の家へはまだよほどあるかな。』」

とかう言ふんだ。俺はもう魂の居場所を見失ふほどびつくりして、返事もそこくに、魚の籠も打ちやつて飛んで來たんぢや。もう濟んだことは仕方がねえ、ぐづくしてゐるうちにもだんく捕方の手が近づく。悪いことは言はねえ、今のうちとつとどこかへ隠れろく。」

と忠告するのです。

さうかうしてゐるうちに、權十といふ魚賣りがまた一人、息せききつて駈け込んで來て、

「た、た、大變だく。これ孫九郎どんや早く逃げろく。手前をからめ捕るとて、唐丸



籠を持つた捕方が、あれあの峠の下で休んでゐたぞ。そしていきなり俺の前に立塞つて『これ間瀬の孫九郎の家に案内しろ。』とかう怒鳴るだ。俺は一時腰を抜かしてべたつとへたばつてしまつたが、兄弟分の手前を見すゝ弱め捕らせちやおけねえと思つて注進に來ただよ。これゝさう呑氣な顔をしてゐずに、一刻も早く落ちのびるだよ。』と追つ立てるやうに急^せかせてゐるが、孫九郎の方は案外平氣で、

「いや兩所とも御親切まことに忝けない。だが、時に今日は幾日かな。」

「人の親切も思はずに何といふ平氣な面あしてゐるだ。今日は幾日かもねえもんだ。三月十五日にきまつてゐらあ。」

「えッ、あに、三月十五日。うーん、さてはいよくやつて來たかな。」

「それ見ろ、手前の身に覺えがあると見えて顔色が變つた。跡の始末は俺等が引うけるから、ささ、一刻も早く逃げるだよ」

「まあゝ待つてくれ。』さてはいよくやつて來たかな。』といつたのは外の話。實は上方で大阪鴻池の御寮人とこれゝかやうしかゝの約束、だが餘りに途方もない話なので、いゝ加減にあしらつて、實はもうすつかり忘れてゐたが、さてはいよく乗込んで來たと見える。だが、もしかしたら狐の嫁取が俺をたぶらかすのかも知れない。狸の大



名行列かも知れない。とにかく、この狭い俺の家ぢや何十人の大一座の座りどころもない。さてどこへ連れ込んだもんなあ。」

「へえー、そんな話か。それならさうと早く知らせておけばよいに。よし／＼こんなことの相談は庄屋さんに限る。ぢや俺がこれから一走りして庄屋さんの智慧をかつて来てやらう。」

親切な八兵衛は一散にかけて飛び出していつたが、やがて立戻つて来て、

「これ／＼、やつぱり庄屋さんはえらいや、大阪の鴻池なんかから孫九郎風情の處へ輿入なんかのあらう筈もない。それは古狐のたぶらかしに違ひないから、あの村端の化物屋敷へ案内して、みんな化物の餌食にしてやるがよい。」

といふ御託宣だ。

「そりや誠によい思ひ付きだ。ではその行列が来ないうちに、ざつと化物屋敷の掃除をしておかうぢやないか。」

といふことに話が一決。近所隣の人々が箒や塵拂を持ち出して、何百年と住んだことのない化物屋敷を、大急ぎで掃除をしてくれました。



行列はいよ／＼村端れに來かゝりました。

箆筒が二十棹、長持が十棹、供揃が八十人、いや實に素晴らしい美しい又仰山な行列です。化物屋敷の掃除も大體済んだので、孫九郎は一寸着物を着換へて、村端れまで出迎へ、

「これは／＼鴻池様からのお越しでございますか、遠路まことに御苦勞に存じます。手前が間瀬の孫九郎でございます。さあどうぞ、むさくるしうはございますが、手前の邸へ……。」

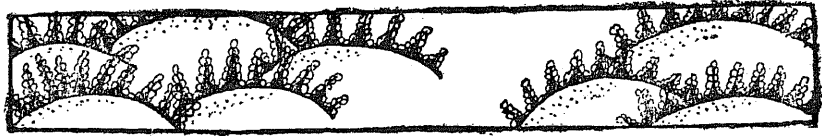
と言つて、例の化物屋敷へみんなを案内していきました。供揃への者供は、

「なるほど、これが千萬長者の間瀬の孫九郎様のお屋敷か。奥方の眼力に間違はない。さすがに宏大なものだ。立派な大邸宅だ。」

といつて感心してゐます。

其の晩は庄屋さんからの仕出で、飲めや歌へやの大酒宴のうちに、孫九郎の倅孫一と大阪鴻池の娘御との婚禮も芽出度く運びがつかしました。さて翌る日になると、大阪から送つて來た供揃の人々は、それ／＼お祝儀を貰つて大満足して歸つて行きました。

後には孫九郎と孫一夫婦の三人だけが、大きな化物屋敷の中に、丁度絶海の無人島へでも打上げられた漂流者のやうに淋しく取殘されました。大きな邸に育つた上に、化物屋敷



といふことなど夢にも知らない嫁女には、何の事もありませんが、その由來を知りぬいてゐる孫九郎親子には、こゝに住むのが怖くて／＼堪りません。それで夜になると、親子とも「今夜は一寸親戚へ行つて來るから、留守居をよろしく頼む。」とか、「今夜は據ない用で友達を訪問して來るから後をたのむ。」とか何のかのと口實を設けては出て行きます。「鴻池の娘だなど、言つても、まだ／＼狐か狸か正體が分りやしない。眞人間なら氣の毒だが、留守中に化物に喰はれるなら喰はれてしまつた方が始末がよい。」といふ肚なのです。

一三

さて夜がほの／＼と明けかゝる頃に孫九郎親子は、おづく／＼化物屋敷へ歸つて見ました。すると、昨夜のうちに喰ひ殺された筈と許り思つて居た嫁女は、しとやかに閻際に手をつかへて

「御父様、旦那様お歸り遊ばせ。」

と挨拶をして迎へ入れるのです。親子は

「おい／＼今のは、もしかしたら嫁女を喰ひ殺した化物の變化（へんか）ではあるまいか。」

と、怖へて仕様がありませんが、さうかといつて本當の人間らしくもありませんので、そこから姿を隠してしまふわけにもゆかず、毎晩々々いゝ加減な口實を設けては出て泊つて歸



りますが、嫁女の毎朝の出迎へから、物言ひ動作に至るまで些しも變つた所がありません。餘りの不思議さにたうとう或日のこと、孫九郎が

「これ、嫁女や、この頃何かと忙しいので、ろく／＼家に寢泊りしたこともなく、そなたに留守居ばかりさせて誠に氣の毒ぢやつたが、何かその間に變つたことでもありはしませんでしたか。」

と、おつかなびつくりながら探りを入れて見ました。

すると嫁女は、恭しく手をつかへて、

「はい、これぞと言つて別段變つたこともございませぬが、さやうでございませぬ、毎晩十二時頃……」

と、こゝまで話が來たとき、親子は目を見合せてぶる／＼と戦きました。併しそんなことには氣づかない嫁女は。

「……十二時頃になりますと、お二人の御來客がございませぬ。お出迎へ申上げると、『私達は孫九郎殿の身内の者でござるが、今晚も御兩所が御他出ぢやによつて、留守居として頼まれて參じた者でござる、食事も何も濟ましてあるから、一切お構ひないやうに。』との仰せでござります。」



親子は顔の色を失ふばかりにおそれ戦いて小刻みに頭を打ふるはしてゐます。併しそんな事には無頓着に嫁女は尙ほ言葉をついで、

『どちらのお部屋へ』と申し上げますと、『あの一番奥の間へ通して戴くことにしようかね。』と年上の方が仰しやいました。すると『それが宜しうござりませう。』とお年若の方も御同意なさいましたので、其の通りに致して置きました。お二方は『お湯も茶もいらぬ。』との仰せでござりますれど、それでは餘りに失禮と存じまして、昨夜は夜食をととのへて持参いたし、お次の間まで参りますと、何やらお話の後で痛く御愁歎の御様子でございますので、そんなお席へ立入りますものも不躰かと存じまして、そこに暫く差控へて承るともなく聞いて居りますと、年上の方と思はれますのが、『……全くこれだけの財寶を、日の光にも遭はせずにかうして土中に朽ち果てさせるのが、如何にも口惜しくて……』と仰しやつて聲をお曇らせになりました、お若い方らしい聲が「私共の宙に迷うてゐる種はその事でございます。これさへ明るみへ出ますれば……」などと合槌を打つていらつしやいました。

かうした報告を聞いた孫九郎親子は、恐怖の半面に一種の好奇心が踊り上つて來るのを感じました。それは此の化物屋敷にからまる古い傳説を思ひ出したからであります。



——今から數百年前、この屋敷には巨萬の富を積んだ大分限者が住んでゐました。ところが或年の或閨の夜に、海賊船がこの濱邊に錨を卸し、數十人の兇賊どもが手に獲物を持つて、此の邸に躍り込み、手當り次第に人々を塵殺にし、家財や什器を掠奪して引上げたが何でも第一の目的物たるお金だけは少しも見出すことが出来なかつたか。

一四

そこで親子は其の奥の間といふ所へやつて来て、先づ疊を上げて見ましたが、何も變つた所はありません。次に床板を取去つて見ました。すると床下の地面に心持ちもち上つてゐる處がありました。そこで勇を鼓して鞆でもつて其の箇所を掘り返して見ました。五寸……八寸、何もありません。いよく鋏先が一尺程の所まで掘り下げていつたかと思ふ頃、カチリと音がしました。で、そこを掘りのけて見ると、それは伏俯せにした小皿の一枚でした。小皿は幾枚も並べて伏せてありました。その小皿を取除けると、そこには驚くべき輝く幸福が潜んでゐたのでした。小皿は實は大きな甕の蓋として用ひてあつたので、そこには目を射る山吹色の大判小判が一ぱい満たされてありました。其の側を掘り返すと、同じやうな甕がまだ三つ、都合四個の金甕があつたのです。親子は雀躍りして發掘に従事しました。其の總額は莫大なものでした。



早速この旨を庄屋を通じて代官に届出しましたが、ずつと前から廢家になつてゐて相續人も無いことであるから、發見者たる孫九郎親子に下げ渡されることになりました。

一五

孫九郎親子は忽ちにして巨萬の大分限者になり上りました。それこそ本當に大阪の鴻池に比べても決してひげをとらない千萬長者になつたのであります。そこで其の屋敷でかつて海賊どもの兇刃に罹つて横死した主從達の菩提を吊ひ冥福を祈る爲に、近郷近在の僧侶を悉く招請して、思ひ切つた盛大な供養會を營みました。

毎夜十二時と期してはやつて來て、奥の間で腕拱いて歎き愁へてゐた主從の姿は、それからはふつつりと跡を絶つてしまひました。さうして孫九郎一家の賑やかな笑ひ聲が、春風を思はせるやうに其の部屋々々をさゞめき流れて居りました。(二四、九、二二)

貧乏は達者の基　無病は一生の極樂